

パターンを超えて思考すること：身体、言語、状況（Gendlin, 1991）（その1）

Seto, Eri / 末武, 康弘[訳] / 木村, 喜美代[訳] / 酒井, 茂樹[訳] / 小田, 友理恵[訳] / 大迫, 久美恵[訳] / 宮尾, 一憲[訳] / 宮田, はる子[訳] / 瀬戸, 恵理[訳] / 吉森, 丹衣子[訳] / Suetake, Yasuhiro / Kimura, Kimiyo / Sakai, Shigeki / Oda, Yurie / Osako, Kumie / Miyao, Kazunori / Miyata, Haruko / Yoshimori, Taeko

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

現代福祉研究 / THE BULLETIN OF THE FACULTY OF SOCIAL POLICY AND ADMINISTRATION : Reviewing Research and Practice for Human and Social Well-being : GENDAI FUKUSHI KENKYU

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

2019-03-01

< 翻 訳 >

パターンを超えて思考すること
— 身体、言語、状況 — (Gendlin, 1991) (その1)

末 武 康 弘¹⁾
木 村 喜美代²⁾
酒 井 茂 樹³⁾
小 田 友理恵⁴⁾
大 迫 久美恵⁵⁾
宮 尾 一 憲⁶⁾
宮 田 はる子⁷⁾
瀬 戸 恵 理⁸⁾
吉 森 丹衣子⁹⁾ 訳

【抄録】 本稿は、*Thinking Beyond Patterns: Body, Language, and Situation.* (Gendlin, 1991) の日本語訳を試みるものである。原著については、*The Presence of Feeling in Thought.* (Ouden & Moen, 1991, New York: Peter Lang) の中に収録されていたジェンドリン執筆の同タイトルの章が抜粋され、The International Focusing Instituteより本の形で頒布されている。今回の訳出のテキストとして用いたのは、このThe International Focusing Instituteから頒布されている版である。

心理臨床家としても哲学者としても名高いジェンドリン (1926~2017) は、2017年5月1日に90歳で亡くなったが、その哲学的な業績は多くの人に注目されながらも、まだ十分な解明が行われていない。私たちが訳出を試みる*Thinking Beyond Patterns: Body, Language, and Situation.* は、彼の哲学における初期の主著 *Experiencing and the Creation of Meaning.* (Gendlin, 1962/1997) と後期の代表作 *A*

-
- 1) 法政大学現代福祉学部・大学院人間社会研究科教授
 - 2) 前・法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻研究生
 - 3) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程
 - 4) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程
 - 5) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程
 - 6) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻研究生
 - 7) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程修了
 - 8) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻研究生
 - 9) 法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程

Process Model. (Gendlin, 1997/2018, この2冊はいずれもEvanston: Northwestern University Pressより新装版が出版されている) の中間に執筆された、これらに並ぶ重要な著作であり、特に彼が開発した理論構築法TAE (thinking at the edge) の哲学的な基礎を形成していると考えられるものである。

A、Bのセクションと全11チャプター、計131頁 (pp. 21~151) からなる原著のうち、本稿ではセクションA のチャプターA-1の中の1~7節 (pp. 21~32) を訳出した。翻訳の作業は、法政大学大学院人間社会研究科末武研究室の博士後期課程ゼミの中で行った。初訳の担当を決め、その訳文をゼミにおいて全員で検討した。今回の初訳の担当者は、木村喜美代 (1節、2節、3節)、酒井茂樹 (4節)、小田友理恵 (5節、6節)、大迫久美恵 (7節) である。

【キーワード】 ジェンドリン パターンを超えて思考すること 身体・言語・状況

セクション A ¹ 訳注¹⁾

チャプター A-1 : 導入 (Introduction)

1. プロジェクト——形式以上のものとともに思考すること

私のプロジェクトは、パターン (形式、概念、定義、カテゴリー、区分、規則……) を超えたものを——について、とともに——思考することである。

このようなプロジェクトは現状では不可能であるように思われる。そしてそう思われるのは、きわめて強固な哲学的理由によるものである。特定の、とても基本的な諸仮定が克服される必要がある。それらを不確かなものにしておくわけにはいかない。その克服は新しい思考とともにのみ生じうる。

論理的形式やパターンは、人々や状況の複雑さを包含することはできない。形式や区分は、形式や区分が何であるか定義することができない。それらは、明確さとは何であるかについて明確ではない。それらは、定義を定義することができない。どんな概念も、概念がどのように働くかということ十分に概念化できない。パターンや規則や形式も同様である。しかし、精確なパターンを軽視すること、あるいはパターンは機能しないと言うことは、大きな誤りである。セクションBで私たちは、パターンについて——それがどのように働く^{訳注2)}のか——議論するが、決してパターン単

¹ (原注 1) 本論文に目を通し、批判的に検討してくれた、次の人たちに感謝する。Elizabeth Behnke, Elizabeth Davies, Aage Ekendahl, Gregory Fried, James G. Hart, Mary Hendricks, Gad Horowitz, David Kolb, David M. Levin, Richard C. McClear, Robert Scharff, William Sterner, および Douglas Stuart.

独で理解しようとはしない。パターンは常にパターンを超えて働く。私たちはその働きを、概念的
形式とともに私たちが思考することの中で、さらに機能させるためのあり方を必要としている。

論理的形式は単独で成り立っているようだが、それはそのように見えるだけである。例えば、三
角形のパターンは、内角の和が 180° であると規定されるときにのみ成立するように見える。2 足す
2 は、4 になるだけに見える。水素原子を規定する明確な概念的で空間的な構造は、それだけで成
立するように見える。そして「男性が女性のためにドアを開けて待つ」といった明確な社会的ルー
ルも、それだけで成立しているように見えるのである。これらの諸形式は、実際に生起することの、
より幅広い複雑さを規定しうる、ゆるぎない意味として機能する、と見ることが可能である。しか
し——私に言わせれば——生起することは、応答する (talk back) ことができるのである。実際、
生起することは形式や規則に、それらの意味と働きを与える。形式は決してそれだけでは働かない。
それは常に、より広くより複雑な秩序の中でのみ働く。

次のように問う。私たちは、このより複雑な秩序とともに思考することができるだろうか？ 私
たちは、私たちが思考する中でそれを機能させることができるだろうか？ 私たちは、形式として
現れるだけのものではなく、より複雑なものである何かを思考することができるだろうか？ そし
て、複雑さは、その複雑さがどのように機能するかについて私たちが思考することの中で、機能で
きるだろうか？

言語に伴う疑問が直ちに生じる。形式以上のものについて語ったり思考したりする方法はないよ
うに見える。それを解釈したり、それを形作る何らかの方法がなければ、それについて語ることは
できない。(例えば、私はまさに「それ (it)」とすることで、それに照合した。そうすることは、
人が指し示すことが可能になるような分離した何らかの形式を、それに与えるように思われる。)

たとえ形式よりも幅広い秩序が存在するとしても、おそらくそれは概念や言語の形式の中でのみ
語ることができるものである、と思われている。言語は形式、区分、規則からまさに成っているよ
うに見える。しかしこうした、あるいは他の種類の形式も、私たちが語ったり思考したりする以前
でさえ、すでに私たちの状況や経験 (experience) ^(訳注:3) の中でその役割を果たしているのだ。

2. 問題——形式は常にすでに (*always already*) 働いている

古代の哲学者たちはこの問題を知っていた。観察や経験についての中立的な報告によって始める
ことはできない、と認識することが哲学の起源である。多くの文化的で概念的な諸形式は、私た
ちがそこから思考するものとしての、その時のどのような状況、経験、思考の中であっても、常に
すでに働いてきた。

顕在的および暗黙的 (implicit) ^{訳注4)} な諸仮定は、異なる文化や生活態度や概念的なアプローチによって多様である。諸仮定の何らかのセットを前提とすることによってのみ、人は他者を分析することが可能となる。その結果は、相反するそれぞれの分析によって、単純化できない多様なものとなる。

私たちは、まさに経験的にだけでは問題を解決することはできない。経験的に問題を解決することは、何らかの概念的で社会的な諸形式が、私たちが観察する以前に常にすでに暗黙的に機能していた (*always already functioned implicitly*) という事実を見過ごしている。通常の実験主義は、私たちが観察する以前の経験の形成の中に含まれているものを検討できない。

しかしそうであるなら、形式やパターンへの批判はいったいどのように可能なのだろうか？

3. 諸仮定における解決と変化の方向

形式以上のものとともに思考することは可能である。なぜなら、概念や社会的形式が経験（状況、実践、身体、複雑さ...）を完全に規定しているという仮定は、過度な誇張であるからである——概念や社会的形式が規定するものを何と呼んだらよいのだろうか？——。後に私は、1つのスロットの中に入る、さまざまな言葉や形式のそうした繋がり (*string*) を用いる私のやり方について論じる。

確かに、より複雑な秩序はさまざまな形式を含んでいる。顕在的そして暗黙的な諸形式は、より複雑な秩序の中で常に何らかの役割を果たしている。常に諸形式とより複雑な秩序の両方があるのだ。しかし、私たちはそれらがともに機能する仕方を探究することができる——もし私たちが、それらがともに機能する仕方を、まさに思考することや語ることの中で、ともにそれらを機能させる仕方を見出すならば、であるが。

そう、諸形式は常に働いているが、しかし私たちは諸形式から論理的に導かれる結果として起こりうるもののみを常に手に入れているのではない。結果は、とてもより多くの、そして異なった何かになりうる。なぜなら、諸形式がその中で - 働く (*work-in*) 何かが応答する (*talk back*) からである——それは逸脱ではなく、さらなる精確さを伴う。

形式以上のものである秩序は、多くの生き生きとした注目に値するあり方で、言語や認知の中で機能している。そのようなあり方に気づき、そして私たちが思考する中でそのあり方を機能させる方法があるはずだ。言表 (*explications*) ^{訳注5)} によって、そのあり方を別のあり方に置き換えるよりも、私たちはこのような機能を、その言表の間も、その後も、作用し続けるようにさせることができる。もし私たちがそうする方法を見出すことができるなら、その時には「エクスプリケーション

(explication)」という言葉は、その伝統的な意味から変化するだろう。

4. 背景

このプロジェクトの哲学は、私の『体験過程と意味の創造 (*Experiencing and the Creation of Meaning*)』や他の著作に示されている。この哲学は、心理療法、文章表現の指導 (Elbow, 1989^{訳注6} ; Perl, 1983^{訳注7}) など、他の領域への応用も導いた。

今日、形式を超えて思考することは地歩を得つつある。それはまだ一般には不可能であると思われるが、思想家たちはますます、こうしたプロジェクトを求めるようになってきている。(例えば、Williamsの「より濃密な思考 (thicker thinking)」^{訳注8} や、Putnam^{訳注9}、Cavell^{訳注10} を参照。)

多くの人々は、経験の広大な複雑さをまさに見出ししており、そしてその複雑さのすべては外部から与えられた (imposed) 諸形式から派生しているわけではないことを知っている。とは言え、多くの人々は、ある程度まではその複雑さについて思考しているが、しかしそこにとどまっているのである。私たちは、その複雑さとともに、そしてその複雑さから、さらに思考するあり方を必要としている。

ここで明らかにするように、このように思考することは、ほとんどの概念の構造に内在している、そして理論的に思考することにおいて用いる通常の仕方の中にある、特定の非常に深く保持されている諸仮定を変えるものである。

私たちの課題は、単にこれらの諸仮定を否定することではない。厳密に吟味すると、これらの諸仮定は実際には信じられていないということがわかるので、その諸仮定を否定することは難しくない。しかし、非常に重要なシステムティックな理由によって、その諸仮定はほとんどの概念の構造の中に組み込まれている。私たちはその理由を知る必要がある。その諸仮定は、複雑さの中で、そしてその複雑さとともに思考する私たちのあり方の中で変化するだろう。さらに、セクションBにおいて、新しい思考のあり方が現在の科学に関連しうることを示す。

最も問題なのは、秩序は経験に対して外部から与えられた (*imposed on*) 何かにすぎないという仮定である。その仮定では、形式、区分、規則、あるいはパターンが唯一の秩序であり、その他には何もなく、「他 (other)」もなく、したがって、形式とそれ以上の何かとの間には、可能な相互交流はない、とされる。そこでは、応答するものは無秩序の他に何も無い、と考えられているのである。

経験に対して一方向的に秩序が与えられるという仮定は、それ以前の誤謬を正すために採用された。すなわち、そうすることによって、科学は自然をそのまま写し出す、あるいは描き出すという

誤った見解が訂正される、と考えられたのである。自然の秩序は、表象されえないし、近似的に描き出すこともできない。なぜなら、自然には、私たちに正しく把握されることを待ちつつ、単純に存在しているような、単独の形成された秩序 (*single formed order*) は存在しないからである。この訂正においては、自然とは**どれも私たちが付与した秩序**にすぎない、と仮定されている。

しかし、それは過剰な訂正である。確かに自然が、変動する仮説的な諸構築と諸操作に応じて、さまざまな形でそれ自身を現すことは明らかである。自然は、異なるアプローチには異なって応答するにもかかわらず、どのアプローチに対しても、まさに、常にきわめて正確に応答する。この応答の仕方は、いくつかのパターンの1つのセットでないにもかかわらず、ある秩序を示してもいい。それは生命力にあふれる多くの役割を果たしている。その役割はまったく気づかれやすいのに、これまでほとんど探究されてこなかった。

私たちは問わなければならない。諸形式と、より以上のもの (*the more*) の複雑な秩序は、どのように協働しているのか。より以上はどのように機能しているのか？ (*How does more function?*) そして、諸形式は、あるより以上 (*a more*) の中でどのように働いているのか？ 二つめの問いは、次のように分けられる。

1. **顕在的な**諸形式は、論理や科学において**単独で機能するように見える**場合でも——より以上とともに (*with more*) —— どのように機能するのか？

2. 諸形式は、それらが経験の中で**暗黙的に機能するとき**——すなわち、それらは、私たちが思考する以前に、どんな経験や観察の中にも（「常にすでに (*always already*)」）入ってしまっているとき—— どのように機能するのか？ もちろん、私たちは諸形式を考慮しなければならないが、諸形式が暗黙的にどのように機能するかを考えなければならない。私たちは、諸形式の暗黙的な働き (*implicit working*) が、全く想定されていなかったことに気づくだろう。²

西洋哲学におけるカント - ヘーゲル - ニーチェの流れは、この問題を解決困難なものにしてきた。諸形式の役割をシステマティックに誇張したことで、形式以上のものはまったく失われた。形式がそれ自身の秩序をもっていることは考慮されない。すべてのことは外部から与えられた諸形式、諸パターン、諸規則によって秩序づけられるものとして見なされる。ほとんどの現代の哲学者たちは、自然、人間の本性、人、実践、身体といったものの秩序をすっかり失ってしまっている。

² (原注2) 多くの人々は、形式や区分や概念よりも複雑なものとは、**暗黙的な諸概念**の中にある、きわめて多くの相互に矛盾する、歴史的な残余物に過ぎないはずだと主張してきた。私たちはそうではないとわかるようになるのだが、もしその主張の通りだったとしたら、私たちは暗黙的な概念が**どのように機能するのか**を吟味しなければならない。もしも暗黙的な諸概念が**顕在的な**ものであれば、それらは互いに対立し、互いを消し去るだろう。しかしそれらは、何らかのあり方で暗黙的に、ともに機能するのである。それゆえ、諸概念が暗黙的に機能するときには、そのようなものとしての諸概念を超えた、より以上 (*more*) がそこに含まれていることが私たちにはわかるのである。

哲学者たちは、どんなものでもそれ自身の秩序を持ちうることを否定する。すべての秩序は、ある歴史、ある文化、あるいはある概念的な解釈によって、まったく外部から与えられていると仮定されている。そして、その解釈はさまざまであるのが当然であるとされている。

しかし、この外から与えられる秩序は、何に**対して** (*upon*) 外から与えられるのだろうか。そこには、思想家たちによって違いがある。つまり、単なる「流れ (flow)」だと言う者もいれば、手に負えない障害 (*recalcitrant disorder*) だと言う者もいる。まさに何でもなしのものに与えられるのだ、と言う者もいる。例えばヘーゲルにおいては、思考はそれ自身にのみ出会う、とされる。彼は、区分は区分それ自身によって進行する、と考えた。

外から与えられた諸形式だけが前提とされるときには、人間は共通するものをもたないように見える。異なるさまざまな文化の間で共通して保持される諸形式は、わずかにしか存在しないように見える。人類学者の中には、ただ一つの共通性を見出す者がいる。すなわち、世界中のどこであっても、人々はそれぞれ、その人の名前をもっている、と。それは確かに興味深いことである。世界中のどこであっても、ある**誰か** (*a who*) がいて、瞳の奥から眼差しを向け、自分に気づいてほしいと思っている。しかし、そこに共通するものは何もないのだろうか？ 言語、宗教、家族、そして人間の身体についての文化的な理解の**諸形式**はあまりに異なっているので、普遍的な意味が形成されうることはほとんどない。人類は、もはや一つの種ではないと言われる。なぜなら、ある動物の種のすべての個体は、同じ諸パターンの中に生きているからである。各個体はすべて、同じ仕方で食べ、眠り、同じ求愛のダンスをし、同じ巣を作る。人間はそのような共通の諸パターンをもたない。諸パターンだけが私たちを人間ならしめるとするなら、そこには人間の本性はないように思われる。

フロイト (Freud, 1949) は、自我 (*ego*) とはそれぞれの所与の社会が有する諸形式の産物であると考えた。工業製品のように、自我は、例えば「ドイツ製」と刻印づけられていると彼は言う。社会的に形作られた自我と超自我 (*super-ego*) 以外に存在するのは、イド (*id*) だけであり、それは**組織化されていない** (*unorganized*) 欲動のエネルギーから構成されており、それだけでは行動をもたらすことができないし、社会的な諸パターンはそこには最初には与えられていない、と。フロイトは、身体はそれ自体の行動的な秩序をもっていない、と言う。(筆者の「ナルシズム批判 (Critique of Narcissism)」^{訳注11)} および、Levin, C.^{訳注12)} と Horowitz, G.^{訳注13)} を参照。)

精神分析的な概念は、特定の文化の諸形式を取り去ると、そこに存在するのは自閉的で原初的なナルシズムだけである、という仮定に基づいて構築されている。フロイトは、文化のみが人間の本性であると考えた。アメリカとは「最悪の可能性である」とフロイトは語った——そこには固有の伝統文化が何もなく、ゆえに強い自我もない、と。(こう語った時に、彼はまだアメリカに行っ

たことがなかったのだが。)

ほとんどの20世紀の思想家たちは、普遍的な人間の本性という考えを嘲笑してきた。思想家たちは、文化と歴史が、ある意味で機械的な身体に与える諸形式の中にのみ、深さと真剣さを見出したのである。人間であるということはまったく人工的なものであり、人間の本性、人間の主体、真実や価値といったものは存在しない——存在するのは、外から与えられた諸形式だけである——と考えられた。そしてそれは、今日の支配的な見解でもある。この見解を越えるためには、まったく新たな方向性 (reorientation) が求められる。

外から与えられた秩序という仮定は、人間の本性だけでなく、自然全体にも関係している。自然とは、単なる「構築物 (construction)」であると言われる。自分たちが自然を仮定し構築しているのだということを自覚するだけでも、科学者たちは確かにもっと責任ある行動を取るようになるだろう、と語る哲学者もいる。科学とは、恣意的で、政治的なものに過ぎず、仮定したことの結果に過ぎない、と理解されている。科学そのものが外から与えられた諸仮定であると考えられているので、そうした仮定に疑問を投げかける者がいたとしても、そこでは何も見出すことができないのである。

倫理もまた、一つか、一連の仮定や与えられたもの (impositions) によるものであるように見える。人はどのようなこともなしうる、と言う人たちもいる (プラトンのトラシュマコスや、ドストエフスキーのイワン・カラマーゾフのように)。私たちが何を与えるのかを選択することに関して、「責任」感を見出す人たちもいる (例えば、サルトル)。しかし、こうした人たちも皆、外から与えられた諸形式が陥るまさに難問 (gap) を見出しているようである。

私たちの語ることや考えることが、形式や区分や法則やパターンから成るものに過ぎないのであれば、私たちは以上にあげた問いの先に進んでいくことができないのである。

5. マルクス、ディルタイ、そしてプラグマティストたち

私たちが外から与えられた秩序以上のものを探求するときには、私たちはこれまでの哲学者たちについて異なって理解するようになる。私たちは、そうした哲学者の何人かが、実は、これまで無視されてきた新たな始まりをつくり出していたことを見出す。

例えばマルクスは、人間の本性を、それぞれの社会が与える諸形式の産物であるとは考えなかった。彼は、現にある社会が人間の本性を「歪めて」いるのであって、したがって人間の本性は「未完了 (unfinished)」である、と述べた。

しかし、私たちは未完了の何かとともに思考することはできるだろうか？ 未完了の何かは、私

たちが思考する中で一つの**概念**として作用し得るだろうか？ 私たちはそうすることができる。そのことは、次第にわかるようになるだろう。そう、——確実に理解しながら、システムティックに——私たちは、自分たちがどのように概念を形成し、使用するかということの中で、未完了のものを機能させることができるのである。

ディルタイは人間の本性を「経験していること (experiencing)」として考え、それは常に**暗黙的な「理解」**でもある、と述べた。彼は次のように言う。「原理的には、人間的なものは何であれ理解可能である。」この言葉は、今日ではナイーブなものに聞こえるとされる。つまり、きわめて多様な文化や人々のあり様を、彼が知らなかったから仕方がないかのように。しかし、彼がそのように考えたのは、彼にとっては、**理解は共有された諸形式のみによって構成されるものではなかった**からなのである。それどころか、私たちが他者の経験していることを探究するとき、私たちの経験していることはより広大なものになるのである。このより広大なプロセスの中で、私たちは他者を、その人がその人自身を理解するよりもさらに**精確に理解する**。そして、私たちの自分自身についての理解もまた広がるのである。しかしディルタイは、共有された諸形式以上のものがどのように機能するのかについては、それほど先には進まなかった。私たちは、それとともにさらに思考したいのである。

プラグマティストたちもまた、今日言われているもの以上のことをなした。プラグマティストたちは、あらゆることに対して、それがどのように作用するかという点において評価を行ってきたが、そのことを規定する価値や目標について問うことをしないでそうしてきた、と言われる。しかしそのような批判は、価値とは常に外からもたらされる外的基準でなければならない、ということ的前提としている。パース、ジェームズ、デューイは、実践の中で、また実践から、どのように目的と基準が**発展する**のか、そしてどのようにそれらが——単に外から与えられることによってではなく——変化するのかを記述した。そのようなアプローチがすべての価値についての問いを一挙に解決するわけではないが、かなり多くの部分を確かに解決し、外部に由来する価値という過度に単純な概念を超えて、残された問いを前に進めたのである。

次に、近年の哲学者たちが、形式以上のものとともに思考するあり方をどのように指し示したのか、そして、進む道のどこで行き詰まってしまったのかを見てみよう。

6. ヴィトゲンシュタインと言語の使用 - 諸文脈 (the use-contexts of language)

かつてヴィトゲンシュタインは、何人かの同僚がカトリック教会に入会したと聞いたときに、次のように言った。「それは、誰かが綱渡りのための道具一式を買った、と言うのに似ている」

(Drury, 1981^{訳注14}) と。彼は、道具を購入することが、すなわち実行するためのスキルを獲得することにはならない、という意味のことを語ったのである。この言葉や、彼の他の多くの言説 (Chatterjee^{訳注15}) を参照) から、ヴィトゲンシュタインが形式以上のものによって思考する仕方を見出していたことは明らかである。しかし、それはある線上に留まっているに過ぎないものだった。すなわち、彼は言語の牢獄の中に閉じ込められていたわけではなかったが、しかし言語を超え出たのでもなかったのである。彼には、その線を踏み越えて言語の外側に行くあり方がわからなかったのである。しかし、この線上を歩くことは可能だった。スキルは必要だったけれども。

ヴィトゲンシュタインにとって、言語の内側にいることには二つの方法があった。すなわち、一つは概念によって誤って導かれること、もう一つはその線上を歩くことである。誤って導かれるとは、概念の範囲内で思考することである。彼は、私たちの説明的概念は、私たちを誤った方向へ導くものであることを示した。彼はどのようにしてそれを示すことができたのだろうか？ 言語の外側に行かずに、ヴィトゲンシュタインは概念以上の何かを見つけたのである。

ヴィトゲンシュタインは、彼が考察したどの概念においても、その概念のために私たちが使用する言葉は、異なる例においては同様の仕方で適用されないことを示した、と言える。彼は、言葉が使用される二、三の例ではなく、多数の、時には二十三もの例を取り上げたが、それぞれの言葉はまったく精確なものであり——かつ異なるものであった。概念にぴったりと当てはまる言葉はないのだ。彼の著作には、数千ものそうした例、そしてそれぞれ異なる例があげられている。

私がここで指し示しているのは、彼があげた例は、私たちの概念よりも、さらに難澁に秩序立ったものである (*more demandingly ordered*) ——つまり、さらに複雑である——という事実である。それは、私の言い方で述べると、ヴィトゲンシュタインは複雑さ (*the intricacy*) と遭遇したのである。ほとんどどんなものも、概念的なパターンがそうである以上に、はるかにより複雑に秩序立っているのである。

ヴィトゲンシュタインは、自分が、概念やシステムよりもすぐれて優位な地点へ至るあり方を思考してきたことを知っていた。しかし、彼はまさにその線上でとどまった。そこからさらに思考するあり方は、不可能であると思われたのである。彼を継承することを望んだオックスフォード学派の動向は、実際にはそこから少し後退した。その後退によって、言葉は、状況におけるその使用を意味する——すなわち、言葉は、それが語られうる状況の中で、何かを表したり変化させたりする——ということがまさに強調された。言葉の使用 - 諸文脈は、いかなる共通する単一の像やパターンももってはいない、というように。ヴィトゲンシュタインが述べたように、言葉の状況とは「家族 (family)」であって、共通するパターンではない。さらに言えば、オックスフォードの分析哲学者たちは結局のところ、概念によるのでなければ、少なくとも規則によって、言葉の使用を定義

しようとし、言葉が表すことやなすことを把握しようとしたのである。しかし、この努力は失敗に終わった。と言うのも、規則もまた、言葉が意味しうることを制限しないのである。それは失望をもたらした。ヴィトゲンシュタインが扉を開いた複雑さは、彼の仕事の中に取り残されたままである——そこには限りなく膨大な種々の例があるだけにしか見えない。そこでは決定的な問いがなされなかったのだ。その問いとは、暗黙的な複雑さはどのように機能するのか？ どのように言葉は働くのか——きわめて複雑に、そして形式や規則によって制限されない新たな仕方では——？ というものである。

7. フッサールとハイデガー

同じ頃、ヴィトゲンシュタインよりほんの少し早く、フッサールもまた（私が呼ぶところの）複雑さ（*the intricacy*）を見出していた。それは、彼に古い理論的諸概念を拒否させるものでもあった。フッサールは、通常の実験が、古い諸理論よりもはるかに具体的でもある、まったく異なる記述を生じさせることを見出した。例えば、私たちは対象を、一度にすべての側面から見ることはできないし、常に一つの角度からのみ見ているにもかかわらず、対象は平面的に見えているわけではない。実際に経験される時間との関係（*time-relations*）も、時間が通常表現されるあり方とはまったく異なっている。彼はまた、あらゆる事象が、ある意味では明確であり、ある意味では曖昧であることを見出していた。フッサールは、このような経験的なあり方によって彼が吟味したどんなものの中にも、何層にも積み重なっている、さらなるさまざまな特殊性（*further specificities*）を見出した。彼は、すべての古い諸理論を超えて、はるかに先へと進み、具体的なさまざまな言表（*explications*）の広大なカタログをつくり上げた。

論理的な科学によって構築された普遍の中に私たち自身が存在する、と考えるのではなく、フッサールは、科学は現象学的な法則の中でのみ可能である、と言った。

フッサールは、すべての経験が構築されるあり方について、現象学的な法則を体系化できると考えた。彼は、諸現象が有する現象学的法則の特性を発見した、と考えたのである。しかし、フッサールが、彼自身が記述するために持ち込んだ（*brought*）特定の区分（*distinctions*）や図式（*schemes*）に応じる中で、現象学的な法則を見出したことは明らかである。彼は、どんな種類の発見（*finding*）が、持ち込むこと（*bringing*）と区分できるのか、そして区分できるとしたら、それはいつ、どのように可能なのかを問わなかった。さまざまな区分から始めるとき、そこに何が見出されるのかを彼は問わなかったのである。例えば、彼は万事を、知覚（*perceiving*）、感情（*feeling*）、意志（*willing*）という三つの領域に区別することから始めた。長年にわたって、彼はし

ばしばこの三つの区別 (division) を修正したが、しかし彼には、この区別がもっと正しいものになるとずっと思われていたのである。彼は、最初に違ったあり方で区別されるなら、経験的な複雑さがどのように異なる結果をもたらすのだろうか、とは決して問わなかった。そのため、彼によるさまざまな言表は、さまざまなあり方でさらに言表されるという、複雑さがもつキャパシティを活用しなかったのである。また、彼は、私たちがここで用い、吟味しようとしている他のいくつかのあり方で、そのキャパシティを機能し続けるようにしようとすることもなかった。彼は、非常に多くの貴重な詳述をなしたが、暗黙的な複雑さが思考の中で機能しうるあり方を発展させることはなかった。

なぜフッサールは、さまざまにありえる区分の影響について問わなかったのだろうか？ それは、彼が発見したものは、彼によるさまざまな区分の結果ではまさになかった、ということを経験して信じていた——そして、そのことは正しかった——からである、と私は考える。彼は常に、おそらく単純な区分からのみ引き出すことができる以上のものを見出していたのである。現象学的な記述とは、単なる理論や推論とは異なるものである、という点において、彼は間違っていなかった。彼を批判する人々は、あたかも現象学が他のどんな哲学よりも基礎を欠いたものであるかのように、その問題を誇張しているのである。

実際のところ、フッサールによって作り出された区分は、その区分の結果そのものではない発見によってもたらされたものだったのだ。暗黙的な複雑さは常に、彼が持ち込んだ以上のものを、彼にもたらしたのである。彼に見えていなかったものは、複雑さはまた、さらに異なっているような、他の区分や区別をもたらす、という点である。明らかに、複雑さとは、あれこれの区分のセットではない。

フッサールによって見落とされ、そして私たちが問おうとしている問いは、次のようなものである。複雑さは、さまざまな形式や区分に応じる中で、どのように機能するのだろうか？ 私たちは、さまざまな形式や区分とともに、そしてさまざまな形式や区分の後に、複雑さが私たちの思考の中で機能し続けるようになるには、どうしたらよいのだろうか？

複雑さがどのように機能するのかを吟味するために、私たちは暗黙的な複雑さが（一つかそれ以上の）言表に沿って機能し続ける中での、思考と発話のあり方がどのようなものであるかを見出さなければならない。術語は、その術語に沿った複雑さを持ち込むはずであり、その結果、その複雑さは言表によって制限されることのないさらなるステップを導くことができる。

フッサールに追随する現象学者たちは、それぞれ異なる区分を用い、異なる結果を得ている。自分たちは思索しているのではなく、ただ現象を記述しているのだ、という現象学者たちの主張が、いかに可能であるのかを問題にする者は誰もいなかった。初期のハイデガーとその後のメルロ・ポ

ンティは、本来的に暗黙的であり、前 - 主題的 (pre-thematic) であるものについて力強く執筆した。しかし、彼らはそれぞれ、フッサールのものとは異なる、彼ら自身による概念的なパターンをそこに持ち込んだのである。誰も、より複雑で、多くのさまざまな区分に応答できるものとともに思考するあり方を見出すことも、探求することもなかった。³

初期の仕事において、ハイデガーはあと一步のところまで近づいていた。『存在と時間 (*Being and Time*)』(1926)^{訳注19)}の中で彼は、世界内 - 存在についての魅惑的な「分析」を行なっている。そこには、感情、理解、言表、そして語りが含まれていた。彼は、そのそれぞれを再 - 理解し、そして、それらがそれぞれにとって、さらに常にそれぞれにおいて「等しく基底的 (equally basic)」であることを示した。私たちの (例えば、ある気分における) 感じられた理解においては、私たちは、「認識が到達できるよりも、さらなる」行為があることの原因を知っている、と彼は言う。

ハイデガーが名づけた「実存範疇 (Existenziale)」とは、すなわち、私たちがいかに存在するかについての諸様相 (aspects) であるが、それらは**諸概念ではない**、と彼は言う。その諸様相は、私たちの世界内 - 存在の (の中での、から形成される) 言表である。しかし、それらはどのようなあり方で、まさに諸概念以上のものになったのだろうか？ ハイデガーは、それらを「解釈学的 (hermeneutical)」と呼んだ。それらは、ある前 - 言表的、前 - 主題的な理解を言表する。しかし彼は、解釈学の一般的な考え方をさらに進めることはしなかったし、後にはその考え方を拒否すらした。概念的な思考を超えた思考を為すためのこの好機を、彼はいったいどのように追及しそなったのだろうか？

フッサールと同様に、ハイデガーは、いかに**他の**諸パターンが私たちの前 - 言表的理解を異なっ
て言表しうるか、ということを問うことはなかった。私たちがどのような話題において思考する際にも、どうすれば暗黙的な理解が機能し続けるようになるかということも、問わなかった。しかし、その不問の理由は、フッサールのそれとは正反対だった。ハイデガーは、経験が、私たちの諸仮定から独立して記述されうるとは考えず、むしろ全く反対なものであると考えた。すなわち、ハイデガーは、私たちの前 - 主題的な理解は、**常にすでに** (*always already*) 歴史的諸決定因によって形作られている、と考えたのだ。そうすることで彼は、そのような歴史的諸決定因がいかに生起するかを理解することを望んだのである。

ハイデガーは、彼の言う「実存範疇」の中に、彼のさらなる思考を進展させるような、概念的である - より - 以上のあり方 (a more-than-conceptual way) を見ることはなかった。彼には、歴史的

³ (原注 3) この問いについて議論することに失敗した現象学者たちについては、私がかいた “Expressive Meanings”^{訳注 16)}、“Experiential Phenomenology”^{訳注 17)}、および “Two Phenomenologists Do Not Disagree”^{訳注 18)} を参照。

諸決定因の中で思考されうるものは、なお西洋の歴史的な諸仮定の内に規定されているように思われたのだ。歴史的諸決定因がいかにかに生じ、そしてそれらがいかに変化しうるのかは、ハイデガーにとっては、ある究極的なメタ哲学のレベルでのみ思考可能である、と思われた。したがって、まさに『存在と時間』以後のハイデガーは、——まぎれもなく概念的に！ (purely conceptually!) ——そこから「実存範疇」が引き出されたと見えるような、ある包括的な「メタ - 存在論 (meta-ontology)」を探ろうとし続けた (1928) ^{訳注20)}。彼は、フッサールが行った経験的な複雑さの描出を破棄し、彼自身による精確な概念 - 以上のものをも拒絶した。彼は、あらゆる複雑さを単一の問いへと逆流させてしまった。それは、どんなものも本来的に歴史的であるなら、歴史的諸決定因 (historical determinants) はいかに生ずるのか？ という問いである。

後に、ハイデガーは詩的な言語も使用したが、彼は常にその一つの包括的な問いを指し示していた。例えば、ハイデガーは、『*木徑 (Holzwege)*』 ^{訳注21)} の中で) 描くことは独創的な何かを加えるが、しかしそれは、なお言語と歴史の包括的な諸決定因がつくっている「^あ ^{ひら} 空け開け (clearing)」の**内においてのみ**そうである、と言う。そのようなものとしての諸決定因を思考することによってのみ、私たちは開け (openness) ^{ひら} を思考するのを望めるようになるのだ、と。

彼は、それら包括的な歴史的に与えられた諸仮定について思考する、二つのあり方を知っていた。その諸仮定に捕われるか、それとも、その諸仮定の中に隠されている開けを取り戻すために、その諸仮定が閉ざしている問いを**再び開く (reopens)** あり方に捕われるか、である。このようにしてハイデガーは、西洋哲学の諸概念への力強い批判——彼はそれを破壊と呼んだ——を提示することができた。彼は、それら諸概念を可視化し、しかもそれらを徹底的に再び開いたので、もはやそれら諸概念を仮定することも、それらから気分よく議論することも不可能になってしまったのである。

ハイデガーは、真の思想家は特定の国家と文化を代表する思想家でしかありえない、という当時のドイツの格言を深く信じていた。(例えばランケは、真の歴史家は徹底した態度においてドイツ国民か、他の国の国民でなければならない、そうでなければ——うわべだけの歴史家である、と語っていた。) 人々において普遍的であるものは、最も矮小な共通項のみであると見られていたのだ。ハイデガーは、私が先に参照したディルタイの文献を読んでいなかった。ハイデガーは、交差的 - 理解 (cross-understanding) という普遍的な人間の本質を見出さなかったのである。

一方でハイデガーは、文化の諸形式はただ外から与えられたものであって、その諸形式がないところに残るのは不確定性 (indeterminacy) だけである、というニーチェの見解に対しては強く反論した。ハイデガーは、諸形式の背後に、諸形式がそのまさに形式性 (formedness) によって覆い隠して、そしてそこからあらゆるものが生じる開けを見たのである。

私たちはハイデガーを、西洋の啓蒙主義を最も棄損し、今日の相対主義をもたらした思想家とし

だけでなく、相対主義に最も強く**反対**した哲学者でもあったと考えるべきである。ハイデガーは、包括的な歴史的諸形式を私たちが自分自身を知る中で深く十分に把握するときには、私たちはそれらの諸形式を通して、それらが「もたらず」開けについて思考することができると主張した。より最近では、このような開けは失われつつあり、新たな区分がただ古いものに置き換えられているだけであり、どんな区分（*distinction*：差異）も不可能であるようだ、というデリダの主張にとって代わられている。

ハイデガーは晩年の仕事において、概念的 - 以上の思考に近づいた。それは、美しい精確さを伴って、彼の初期の諸概念以上のものの中へと開かれた。彼は、彼が「住まうこと（*dwelling*）」と呼ぶ、一つの概念的 - 以上の思考を求めた。しかしそれは、最も包括的な諸仮定を超えるためののみ思考することであった。それはあらゆるものを超えなくてはならなかったので、「住まうこと（*dwelling*）」はどんなことについてもありえないようなものだった。したがって、それはいまだ始まっていないのである。

究極的な諸決定因以外のすべてを置き去りにしてしまったので、ハイデガーは——私が思うに——**それぞれの**状況で、また**それぞれの**思考の瞬間に、形式を超えて実際に機能するものがどのようにあるのかについて思考することができなかった。彼は、どんなに些細な生活や実践でも、それらの内で暗黙的に作用する諸決定因を変化させるために、それらがどのようにより複雑に応答するかということを知らなかった。そのため彼は、歴史的な諸決定因が実際に（私はこう言いたい）**暗黙的に**（*implicitly*）どのように作用するのか、そしてそれらがより広い複雑さの中で作用することによってどのように変化するのか、ということさらさらに探究できなかった。彼は新しい歴史の中の**個々の**人間の役割をさらに分析できなかったのである（Scharffによる**個別化**（*Vereinzelung*）についての考察を参照^{訳注22)}）。ハイデガーは概念的 - 以上の思考をさらに発展させられなかった。彼は、私たちがこれらの数々の問いを**再び開く**ことができるとは考えなかったのだ。

私のやり方で、ハイデガーを読むこともできるだろう。開けは、あらゆるものの中に暗黙的に存在している——そしてその開けは、あらゆるものから私たちの思考の中でさらに機能しうるのである。（私の“*Befindlichkeit*”^{訳注23)} および“*Dwelling*”^{訳注24)} を参照。）

実践と実際の諸状況が、新しい諸決定因の源となりえるということが、ハイデガーにはなぜ不可能だと映ったのだろうか？（Kolbを参照^{訳注25)}。）それは、**経験から論理**を得ることはどうみても不可能である、とカントが考えたのと同じ理由による。彼らは二人とも、経験は**常にすでに**、ある確かな決定因によって組織されているので、その諸決定因の中にある経験からは変化は生じない、と見なした。経験は諸決定因の中においてのみ生じうる、と。

私たちは、この「常にすでに（*always already*）」と「～の中においてのみ（*only within*）」の限界

に対する批判を必要としている。人間というものは、まさに暗黙的な諸概念と文化的諸形式を含んでいるが、私たちはそれらが一方向的な決定因によって作用するものではない、ということを知らう。

以下では、まず簡潔に今日の哲学について見てみよう。

訳 注

- 1) 原著の全体の構成は以下のとおりである。

SECTION A

Chapter A-1 Introduction

1. The project: thinking with more than forms
2. The problem: forms are *always already* at work
3. The direction of a solution and a change in assumptions
4. Background
5. Marx, Dilthey, and the Pragmatists
6. Wittgenstein and the use-contexts of language
7. Husserl and Heidegger
8. Philosophy can be divided into three approaches today
 - a. Philosophies of science
 - b. The tragic view: Derrida's Deconstruction
 - c. Thinking with experiential intricacy (the body, situations, practice, language....)
9. Preview

Chapter A-2 Tracing the assumption of an imposed order

1. The denial of a natural order
2. A critique of the "always already"
 - a) The overstatement
 - b) The reversal
3. How the assumption arose

Chapter A-3 The order of language

1. In what language shall we discuss language?
2. Does the saying disappear in the forms and distinctions?

3. A story from poetry
4. Not just deconstruction
5. A language for this investigation
 - a) Defining naked saying
 - b) The word is further defined by the instance
 - c) More in other words
 - d) To be a saying, the words must work
6. How are these changed meanings derived?
7. In a slot, each word comes after the others
8. Retrieving all the words
9. Words can tell about how words work
10. Thought-ways and concepts
11. Thought-ways
 - 1) A string of words, each after the others
 - 2) A fan of possible distinctions
 - 3) Thinking an instance
 - 4) Self-instancing
 - 5) Letting the more precise pattern be the concept
12. Five concepts
 - a) Implying
 - b) Carrying forward
 - c) The implicit work of forms can change them
 - d) Implicit novelty
 - e) Two pasts

Chapter A-4 Psychotherapy

1. Photographic realism
2. Stories from psychotherapy: The bodily.....
3. Another example : Bits of change in therapy
 - 1) How the past functions in new steps
 - 2) The truth and value direction is carried forward *within* the process
 - 3) Intricacy

4. One more story from psychotherapy : Tracing the progression of steps
5. A regular use of concepts
 - a) Implying
 - b) Carrying forward
 - c) Forms change in working
 - d) Novelty was implicit
 - e) Two pasts
6. Cross-applying
7. A chain of cross-applying
8. New concepts
 - f) More realistic
 - g) Body-sense and situation are implicit in each other
 - h) Implicit steps
 - i) The same direction
 - j) Retroactive revision
9. Psychotherapy research
10. The cluster of concepts

Chapter A-5 What is a situation (body, language...)?

1. We think *this* situation
2. In deliberating we must think the situation
3. Instances are more than their categories
4. A situation is a pre-separated multiplicity
 - k) Pre-separated multiplicity
5. A situation is the implying of further events
6. A situation consists of implicit action-possibilities
7. A situation implies a chance in how it now implies
 - l) Implying, can imply a chanced implying
8. The truth of implying
9. Crossing : Each alternative *is* many other changed alternatives
 - m) Each is a *crossing* of many others
10. Focaling: The crossing, of many *is* the focal implying of one next step

- n) Focaling: crossing occurs as one focally implied next one
- 11. Functions of the body in language
- 12. Functions of the body in language (原文ママ)

SECTION B: PATTERNS

Chapter B-1 Wider than perception and the five separated sense

Chapter B-2 Doubling: patterns, the separation of the sense, empty

- 1. The purely visual exists only in a doubled way
- 2. Separated senses require responding, to patterns as such
- 3. Separated sense-perceptions are symbolic
- 4. Empty space comes from patterns
- 5. How all seems lost
- 6. Human making and mechanics ; the scientist/bird contrast
- 7. Movement-patterns in empty space

Chapter B-3 Resolution of the Conundrum: Patterns carry forward more than patterns

Chapter B-4 Some Examples of the usefulness of these concepts

- 1. Sensations that actually occur, occur-into implied sensations
- 2. Tripling

Chapter B-5 Scientific applications and corroborations

- 1. Inherited behavior and objects
- 2. We resolve an anomaly in the new studies of infants

Chapter B-6 Within, and not within

Notes

- 2) 訳文の太字は原文ではイタリック体、以下同様。また、原文中の“ ”は、訳文中では「 」とした。
- 3) “experience”は、文脈によって「経験」あるいは「体験」の訳語を使い分ける。
- 4) ジェンドリンが用いる“implicit”はきわめて重要なキーワードである。ここでは、「暗黙的」あるいは「暗在的」という訳語を用いる。
- 5) ジェンドリンが使用する“explication(s)”は、言葉による表出の繋がり、その展開のことである。ここでは文脈によって「言表」あるいは「展開」の訳語を用いる。
- 6) Elbow, P. and Belanoff, P. *A Community of Writers*. New York: Random House, 1989.
- 7) Williams, B. *Ethics and the Limits of Philosophy*. Cambridge: Cambridge U. Press, 1985.

- 8) Perl, Sandra. "Understanding Composing." *Writer's Mind: Writing as Mode of Thinking*. Washington: National Council of Teachers of English, 1983. Reprinted in: *Purposes and Ideas: Readings for University Writing*. Ed. D. Joliffe. dubuque: Kendall-Hunt, 1988.
- 9) Putnam, H. *Realism with a Human Face*. Cambridge: Harvard U. Press, 1990.
- 10) Cavell, S. "Must We Mean What We Say?" *Ordinary Language*. Ed. V. C. Chapell. Englewood Cliffs: Prentice Hall. 1964.
- 11) Gendlin, E. T. "A Philosophical Critique of the Concept of Narcissism." *Pathologies of the Modern Self: Postmodern Studies*. Ed. D. M. Levin. New York: New York U. Press, 1987.
- 12) Levin, C. "Art and the Sociological Ego: Value from a Psychoanalytic Point of View." *Life After Postmodernism, Essays on Value and Culture*. Ed. J. Feke. New York: St. Martin's, 1987.
- 13) Horowitz, G. "The Foucaultian Impasse," *Political Theory* 15.1 (1987): 61-80.
- 14) Drury, M. "Some Notes on Conversations with Wittgenstein." *Ludwig Wittgenstein: Personal Recollections*. Ed. Rush Rhees. Totowa, N.J.: Rowman and Littlefield, 1981.
- 15) Chatterjee, R. "Wittgenstein as a Jewish Thinker." *Proceedings. Tenth World Congress of Jewish Studies*. Jerusalem: Hebrew U. of Jerusalem, 1989.
- 16) Gendlin, E. T. "Expressive Meaning." *Invitation to Phenomenology*. Ed. J. Edie. Chicago:Quadrangle 1965.
- 17) Gendlin, E. T. "Experiential Phenomenology." *Phenomenology and the Social Sciences*. Ed. M. Natanson. Evanston: Northwestern U., 1973.
- 18) Gendlin, E. T. "Two Phenomenologists Do Not Disagree." *Phenomenology, Dialogues and Bridges*. Ed. F. Bruzina and B. Wilshire. Albany: SUNY, 1982.
- 19) Heidegger, M. *Sein und Zeit*. Tübingen: Niemeyer, 1960. (First pub. 1926).
- 20) Heidegger, M. *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*. Gesamtausgabe, Band 26. Frankfurt: Klostermann, 1978. (Marburg Lectures, 1928).
- 21) Heidegger, M. *Holzwege*. Frankfurt: Klostermann, 1950.
- 22) Scharff, R. C. "Habermas on Heidegger's Intentions in *Being and Time*." *Proceedings, Heidegger Conference*. Ed. S. H. Watson. U. of Notre Dame, 1989.
- 23) Gendlin, E. T. "*Befindlichkeit*: Heidegger and the Philosophy of Psychology." *Review of Existential Psychol. and Psychiat.* 16.1-3 (1978-79).
- 24) Gendlin, E. T. "Dwelling." *Proceedings, Heidegger Conference*. Ed. R.C. Scharff. U. of New Hampshire, 1983.
- 25) Kolb, D. "Heidegger and Habermas on Criticism and Totality." *Proceedings, Heidegger Conference*. Ed. S. H. Watson. Notre Dame, 1989.